

## ろばの数 (カビール)

昔むかし、ある男がろばを七頭か銅つっていました。

ある日、男はろばを売ろうと思いました。そこで、市場に出かける前に、ろばをぜんぶ集めて数を数えました。ちゃんと七頭いました。

「よし。たしかに七頭だ」

男は満足まんぞくしていいました。それから、一頭のろばにくらをおいてまたがり、のこりのろばをおいたてながら市場に向かいました。

市場に着くと、男は、ろばに乗ったまま考えました。

(ちゃんと七頭いるかなあ。もういちど数えてみよう)

男は、くらの上からろばの数を数えました。

「一、二、三、四、五、六、あれつ、一頭足りない」

男はおどろいてもういちど数えました。

「一、二、三、四、五、六、あれつ」

男はもういちど数えました。

「一、二、三、四、五、六、あれつ」

何度も六頭です。

(まつた。帰つてうちのやつに数えてもらおう)

男は、向きをかえて、六頭のろばを追いたてながらうちに向かいました。夕方、家に着くと、男はよめさんに、

「おーい。出てきてろばの数を数えておくれよ。今朝七頭いたのに六頭になつた。一頭なくしちやつたんだ。ぜつたい迷子まじごにしてないし、売りもしてないのに」といいました。

よめさんは出てきて、ろばを見ていました。

「それは思いちがいだよ。ろばは八頭いるよ。一頭なくしたんじやなくてふえたんだ。おまえさんのまわりに六頭、おまえさんの下に一頭、そして、おまえさんの頭はろばの頭さ。さ、ろばから下りて、ばんごはんにしようよ」

おしまい

